ものづくり体験 提案へ

スカイツリー開業見据え

東京都墨田区

東京都墨田区は、新タワー「東京スカイツリー」の2012年春の開業を見据え、修学旅行向け体験型プログラムを充実させる。江戸時代から続く職人文化などをテーマに〝ものづくり〟の体験学習プログラムを提案。プロモーションや受け入れに向けては、今年5月に観光協会の組織を民間主導の新体制に一新、来年度から旅行会社などへのセールスを本格化させる。

開業初年度に540万人、以降も年平均270万人の集客が予想される東京スカイツリー。一般旅行者はもとより、多くの修学旅行生の来場が見込まれる。この修学旅行生をタワー観光に終わらせず、街に出てもらう提案が墨田区の課題。「地域の歴史文化を生かした本物の体験を提供し、修学旅行を誘致したい」と墨田区産業観光部観光課の高野祐次課長は意気込む。

体験学習のメーンに据えるプログラムは、ものづくり体験だ。江戸期以来、多くの職人が暮らしてきた墨田区には、現在も伝統的な工芸品、身近な日用品を製造する工房が数多くある。製造体験メニューを提供している工房があるほか、製品史や製造工程を紹介する小規模の博物館も25施設を数える。また、機械部品などの先端技術で世界に知られる町工場もあり、学習の素材は豊富にそろっている。

製造体験の事例を挙げると、「すみだ江戸切子館」では、江戸切子の簡単な製造体験ができ、製品や工程の展示施設もある。屏風専門店「和集屋」では2時間ほどの体験ができるメニューがあり、屏風博物館を併設。べっ甲製品、押絵羽子板の専門店などでも製造体験ができる。

ものづくり体験のほか、墨田区の歴史を踏まえた体験学習のテーマとして、東京大空襲の被害に学ぶ平和学習、関東大震災などに学ぶ防災学習などの提案も検討する。

タワー開業まであと2年半。墨田区観光協会の岩井利浩・事業開発担当課長は「修学旅行向けのメニューや受け入れ態勢をさらに充実させたい。パンフレットやDVDを作成し、来年度から営業を本格させる」。今年5月、民間企業からの出向者を含め、一般社団法人として再スタートした同協会は、来年度中に第三種旅行業に登録し、商品造成にも乗り出す予定。墨田区の観光情報はウェブサイト（http://www.kanko-sumida.com）まで。

職人文化が息づく墨田区では、多くの工房が製造体験を受け入れている

スカイツリー（完成予想図）

◆東京スカイツリー

東武鉄道と東武タワースカイツリー株式会社が東京都墨田区の業平橋・押上地区に建設する地上デジタル放送用電波塔。高さは約610㍍。展望施設を備え、商業エリアも併設する。自治体や観光協会と連携し、周辺の観光振興にも取り組む。東武伊勢崎線・業平橋駅前には、開業に向けた情報発信スペース「インフォプラザ」を開設している。詳細はウェブサイト（http://www.tokyo-skytree.jp/）

環境学習がテーマの修学旅行

水俣病の経験を生かした環境のまちづくりを学ぶ

熊本県の水俣・芦北地域は、「環境」をキーワードに4つの分野の修学旅行メニューを実施できる注目のエリア。同地域は、11年の九州新幹線全線開業で関西圏以西からは直通新幹線で訪れることができるようになるので、修学旅行を実施しやすくなる。今回は水俣市での環境をテーマにした修学旅行を中心に紹介する。

①水俣病とのかかわりを学ぶ

水俣病はチッソ水俣工場が、水俣湾などへ流したメチル水銀により発生。沿岸に多くの被害をもたらした。

修学旅行では、さまざまな立場で水俣病と水俣にかかわった人々の自宅や仕事場に班別で訪ね、直接話を聴く「水俣に聴くプログラム」がおすすめだ。水俣病患者とその家族、漁師や、水俣という地名に泣かされてきた蒲鉾屋、水俣出身と言えなかった市民などさまざまな人の生の声を、交流しながら聴ける貴重なプログラム。水俣病の体験談や苦労話などを聞き、参加した生徒たちも熱心に質問する姿が毎回見られる。

②環境について考える

「環境モデル都市」として国から認定を受けた水俣市では、ガラスビンを6種類に分別するなど、資源ゴミを22種類に分別。環境ISOを、小中学校や、家庭、保育園に広めたり、リサイクルやリユースを進める企業が集まって「みなまたエコタウン」を形成している。

水俣病を経験した水俣市では、市民、行政、企業が連携した取り組みを学び、「環境」をキーワードとした地域づくりを知ることができる。

③暮らしと地域づくりを知る

芦北町には、明治初期から伝わる伝統漁法の「うたせ漁法」がある。海底に降ろした底引き網を海風にまかせて帆船で引いていく自然の力を利用した漁で、美しいリアス式海岸を楽しみながら漁を行い、乗船体験と環境学習を実施できる。

水俣市頭石（かぐめいし）地区は、村全体を博物館に見立てた「村丸ごと生活博物館」となっており、地元の人々が生活学芸員として村の中を案内してくれる。水を大事にする暮らし、数十種類の野菜をつくる畑などくらしの豊かさを学べる。

④楽しく遊び自然と向き合う

津奈木町には、「緑と彫刻のあるまちづくり」の拠点施設として整備された「つなぎ美術館」がある。熊本県ゆかりの作品を展示しており、周辺の野外彫刻巡りと合わせて楽しめる。

また、同町では、今後、里山を生かした体験メニューを開発していくという。

修学旅行の受け入れ状況

水俣・芦北地域の修学旅行のコーディネートを行っている水俣教育旅行プランニングによると、水俣・芦北地域では、年間約5千人を受け入れている。約6割が関西以西の学校。最近は環境学習にこだわりを持つ先生のいる私立学校の参加が増えている。

多いのは水俣で半日くらい過ごすコースだが、おすすめコースは「水俣に聴くプログラム」が入る1泊2日コース。また天草地域にある御所浦島で民泊や恐竜化石見学、化石発掘体験と組み合わせたコースも人気を集めている。

それぞれの学校の要望に応じたオリジナルのコース作りにも対応できる。民泊の相談にも応じるという。

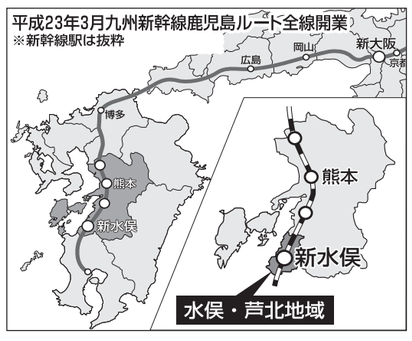
水俣教育旅行プランニングは、「中学校の修学旅行では、水俣で何が起きたか、歴史をしっかりと捉える。被害を受けた人たちも、自分の中に秘めておきたいつらい経験などをあえて話してくれる。そこから自分たちの生活と結び付けてさまざまなことを自分ごとにしてほしい」と話す。

胎児性水俣病患者や障害をもった人が通所する施設「ほっとはうす」のメンバーと交流

うたせ船は芦北町で体験乗船できる

水俣病慰霊碑に千羽鶴を捧げる

ゴミの22分別に挑戦する



岩堂秀明校長

水俣環境学習の実施事例 岡山市立京山中学校

今年の5月20日に修学旅行として岡山市立京山中学校（生徒数259人）が水俣を訪れている。

行程は、水俣湾埋立地でガイドと合流してスタート。水俣病情報センター講堂で、胎児性水俣病患者や障害をもった人が通所する施設「ほっとはうす」との交流を行った。ほっとはうすの通所者6人は、小さい頃の写真を紹介しながら、元気だった頃や発症してからの生活などを話した。

「健康な足を持てたら、車いすの人を押してあげたい」という言葉に生徒たちは真剣に聞き入っていた。

続けて、エコタウンの「空き瓶リサイクル」や草木染め体験、明神護岸での磯の生物観察などを行った。

クラス別の体験メニューを終えた後は、さらに10人から12人程度のグループに分かれ「水俣に聴くプログラム」を実施。水俣にこだわって商品開発を続けてきた「木村蒲鉾店」では、店の2階でかまぼこを食べながら話を聞いた。

地元への思いや素材へのこだわりとともに水俣病の体験談を聞き、生徒たちも熱心に質問していた。水俣市役所では、生徒たちがゴミの分別に挑戦。水俣は22分別で、自分たちの地域と比べ、あまりの多さに驚いていた。

岡山市立京山中学校の岩堂秀明校長は「水俣では、現地でしか体験できないインタビュー活動や胎児性水俣病患者のみなさんと交流ができた。環境や人権学習を実践でき、生徒達は机の上の知識から具体的な体験による知識を得ることができた」と話している。

広報企画：熊本県芦北地域振興局
問い合わせ先
ＮＰＯ法人水俣教育旅行プランニング
〒867-0045　熊本県水俣市桜井町1-1-1
TEL：0966-68-9450　FAX：0966-63-5909
E-mail：oda-miu@mkplan.org
http：//www.mkplan.org/

都会っ子の教旅を誘致

都市と農村の交流事業で

福島県南会津町

福島県・南会津町は、「都市と農村との交流事業」として、都会からの農家民泊・農村生活体験の学校教育旅行の誘致を推進している。昨年、国の進めている「子ども農山漁村交流プロジェクト」で福島県のモデル受け入れ地域に採択され、平成20年度は子ども農山漁村交流プロジェクトのモデル校の小学校1校をはじめ、首都圏の中学校3校、海外からの中学校と高校で2校の計6校を受け入れた。

町主導により受け入れ態勢を短期間に整備し、農家の登録など受け入れ体制を併せて、学校キャラバンや旅行会社セールス活動を実施している。登録農家は現在120軒あり、すべて保健所からの許可を受けている、安全、安心の受け入れ先だ。

平成21年度は、子ども農山漁村交流プロジェクトのモデル校2校、首都圏の中学校と高校で10校、海外の高校2校の計14校の受け入れを予定する。

南会津町は田島町、南郷村、伊南村、舘岩村が合併してできた町。南会津農村生活体験推進協議会では、受け入れが旧町村エリアで均等になる調整をして、受け入れ農家への負担を軽減し、南会津の人柄が十分発揮できるようにしている。

自分の息子や娘として迎える受け入れ農家で、訪れた生徒は南会津の農村の暮らしを体験する。朝4時から起きてトマトの収穫の手伝いや1㌶もあるジャガイモ畑での芋堀作業など、その日、その時、その家で農作業を手伝う。そして一緒に食事を作り、一緒に食べる。

そうした生活で自然の恵みやお世話になった方への感謝の気持ち「ありがとう」の心を育んでもらうことをコンセプトにしている。推進協議会の湯田弘信氏は「各学校のお別れ会には毎回、立ち会っているが、小学校5年生も、中学生も、高校生も、また海外の子どもたちも皆一様に、受け入れてくれたお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんに『お世話になりました。ありがとうございました』と心から礼を言って涙をして別れる。その一時がその子どもの成長を大きくした瞬間と感じる」と話す。

子どもたちにとって南会津での体験は大きな価値のある出来事になるはず。「1泊2日、2泊3日の短い期間に何かを見つけて持ち帰ってほしい。この事業は、地域の活性化という目的もあるが、子どもの成長に必ず寄与しており、絶対に継続していかなければならない」と湯田氏。

農家のハウスでは、野菜の収穫も体験する

間伐など林業作業も体験

湖でボート体験

マキを使った飯ごう炊さんに挑戦

収穫された野菜の選別作業

空中から自然観察

ジップラインアドベンチャー 修学旅行にも対応

斑尾高原

長野県飯山市の斑尾高原に今年夏にオープンした新しいアクティビティ「ジップラインアドベンチャー」が人気だ。森の中に吊られたワイヤーにぶら下がって空中を滑空するもので、鳥になったような爽快感と眺望が魅力。ガイド付きで自然観察を楽しみながら7コースを巡る。中学校の修学旅行のプログラムにも組み込まれ、生徒らを魅了している。

斑尾高原に設置された7コースの総延長は64㌔。最長のコースは140㍍にも及ぶ。約10人を1組として、2時間のツアー形式で催行している。ガイドは安全への配慮のほか、花や鳥をはじめとする斑尾高原の自然についても解説する。

参加要件は身長120㌢以上、体重25㌔以上120㌔以下。体力や技術は必要ない。

一般向けには1日3回のスタート時間を設け、1回当たりの募集枠は3組で計30人。料金は1人当たり3500円となっている。

修学旅行などの団体向けには別途相談に応じる。11月以降の冬季の営業形態については検討中という。

問い合わせは、まだらお高原・そらの家（☎0269・64・3081）まで。

滑空する爽快感と眺望が魅力のジップライン

少人数メニューが好評

見る・作る・学ぶ・参加する

京都 映画のテーマパーク 東映太秦映画村

東映太秦映画村（京都市右京区）では、「見る・作る・学ぶ・参加する」をテーマに、映画村ならではの体験学習のプログラムを用意している。

伝統産業の体験学習は、多くの学校が修学旅行のスケジュールに組み入れる。京扇子、京うちわの手描き体験のほか、紙あんどん、万華鏡の手作り体験などがある。各業種の専門家が講師を務め、ていねいに指導。他の体験施設への移動時間が短縮できることも人気の理由だ。

今年3月からスタートした少人数用の3メニューも好評。班別研修に対応する。京扇子絵付け体験は、めてでも、好みのカタチの清水焼を作れる（1回につき2人まで）。清水焼絵付け体験は、職人の手作りによる清水焼の器に色鮮やかな5色の絵の具で、絵付けが楽しく学べる（1回につき12人まで）。器はマグカップや湯呑み、皿などから選べる。京扇子絵付け体験は、職人が一対一で指導。初めてでも、8色の専用絵の具で自由に絵付けする（1回につき10人まで）。

映画をテーマとしたプログラムでは、「ドラマ映像講座」を新たにスタートさせた。ドラマ作りが学べる講座では、教材シナリオをもとにコンテ作り、それをもとに撮影されたサンプル映像を見てドラマ作りの仕組みを体験できる。

そのほか、俳優と同じ本格的な扮装姿で江戸の町を歩く「本格的時代劇扮装」や「着物着付け体験」「殺陣（たて）講座」など、時代劇映画の登場人物になったような貴重な体験ができる。

「寺子屋おもしろ体験」では、映画製作用の小道具を使い、時代劇の扮装をした俳優が、江戸のエコな暮らしを解説する。小学生を対象とした「大江戸暮らし編」と中学、高校生以上を対象とした「大江戸環境編――江戸時代は循環型社会」の2コース用意した。

同村は、時代劇のオープンセットを公開する日本初の映画のテーマパーク。劇場映画やテレビの人気番組の撮影、日本映画の貴重な資料を見学できる。75年のオープン以来、映画ファンや家族連れ、修学旅行生など幅広い層から根強い人気がある。

パンフレットの郵送、申し込みなど体験学習に関する問い合わせは、東映太秦映画村（☎075・864・7716）まで。

伝統産業の体験学習（上は清水焼絵付け、下は京扇子絵付け）

今年3月のフォーラム

職人の指導でろくろ体験

全国ほんもの体験フォーラム

11月、標津町で開催

第7回「全国ほんもの体験フォーラム・イン北海道」が11月6～7日、北海道標津町を中心とする根室管内で開かれる。地域活性の原動力となっている体験交流形の観光システム。その実務担当者や担い手らが集まり、課題の解決と活発な情報交換を図るイベント。主催は、北海道、標津町などで構成される同フォーラム実行委員会。

7日の全体フォーラムでは、体験観光の実践者によるパネルディスカッション「輝く人・高まる心・ほんもの体験が日本をかえる」を開催。体験教育企画の藤澤安良代表をコーディネーターとして、JTB首都圏の佃慎一・法人営業埼玉支店教育旅行センター所長、南信州観光公社の高橋充専務取締役、和歌山ほんまもん体験倶楽部の刀根浩志事務局長、雪だるま財団の小林美佐子・越後田舎体験推進協議会事務局長、まつうら党交流公社の筒井雅浩・統括マネージャー、沖縄体験ニライカナイの加蘭明宏代表、北海道ネイチャーセンターの坂本昌彦社長、福井県美浜町の丸木大助・商工観光課交流推進室主査、北海道標津町役場の川口真・企画政策課長が本音の意見を交わす。

受け入れの取り組みを北海道経済部観光局や、別海町グリーンツーリズムネットワークの押田栄治事務局長、知床羅臼町観光協会の三浦里紗事務局長、標津町観光ガイド協議会の井南進、福沢英雄、武田敬子各氏が発表。記念講演として、女優で冒険家の和泉雅子氏が「私の北極物語」と題して語る。

8日は課題別研究分科会で「ほんもの体験が日本の未来を拓く」「ほんもの体験が日本の教育を変える」「ほんもの体験が人を高め地域を興す」「ほんもの体験が農山漁村を活かす」などを議論する。

6、7日は「知床の玄関・忠類川サーモンフィッシングと鮭料理」をはじめ、標津町、根室市、別海町、羅臼町、中標津町での1泊2日の体験ツアーを実施する。

参加条件は、体験型観光に興味がある人であれば特に問わない。詳細については同フォーラム実行委員会（標津町商工観光課内、☎0153・82・2131）へ。